近代ドイツにおける農地開発

藤田幸一郎

1　ヨーロッパ史における農地開発と環境

近年における環境問題への関心の高まりのなかで，とくに発展途上国における農地開発と森林破壊との関連が問題とされているが，歴史的にもポンティングの『緑の世界史』[1]が明らかにしているとおり，約一万年前の新石器時代にさかのぼるといわれる農業の成立以来，人類による農地の拡大は絶えず森林その他の自然破壊をともなった．西欧でも11-13世紀の大開墾による農地開発は多くの森林を犠牲にした．14世紀半ばのペストは人口の激減と廃村をひきおこし，大開墾によって失われた森林面積の一部を回復させたが，16世紀のイギリスのエンクロージャをはじめとする経済発展は再び森林面積を後退させただけでなく，オランダその他北海沿岸における干拓と築堤による干潟と低湿地の減少もひきおこした[2]．これら二つの時期を頂点とする開発によって，西欧の農地はほとんどその限界まで拡大され，イギリス産業革命が始まった18世紀半ばには農地として利用可能な未墾地，森林は西欧にはもはやほとんど残されておらず，過度の森林伐採による燃料・木材不足と木材価格高騰が重要な問題として浮上してきた．したがって，ヨーロッパ近代史では農地開発による森林破壊はすでに過去のものとみなされ，イギリスでは森林資源の枯渇による「木材から石炭へ」のエネルギー資源の転換が歴史研究の主要な関心対象となった[3]．

ドイツでも，事情は似通っている．18世紀末に木材不足による木材価格高騰によって「エネルギー危機」とも見えるような現象があらわれ，すでに

ゾンバルトは1916年の『近代資本主義』第二版[4]で，木材不足が木材から石炭への転換をひきおこしたことを指摘した．もっとも，最近のR・P・ジーフェルレの研究[5]によれば，当時あらわれた木材不足とは主に建築材不足であり，燃料不足ではなかった．燃料材としての薪は建材と比べると比較的短期間で生産できたので，人々は燃料不足をそれほど深刻には感じなかったという．また，石炭は輸送費が高くつき，木材より廉くはなかったため，燃料における木材から石炭への移行は急速には進まなかったともいわれる．J・ラトカウ[6]もゾンバルトのエネルギー危機説を批判し，18世紀末の木材不足はとくに新しいできごとではなく，すでに中世盛期の開墾によって森林は無限材から有限財に変化しており，限られた資源を節約することはそれ以来当然とみなされていた．ラトカウによれば，木材不足はありふれた慢性的，日常的現象にすぎず，その克服は「木の時代の内部における合理化」の努力によっておこなわれたのであり，木材不足に由来するエネルギー危機を契機とする「木材から石炭への移行」というゾンバルト説は否定されなければならない．

とはいえ，ドイツ林学におけるK・ハーゼル[7]らの森林・林業史の諸研究は，村落周辺の森林資源の濫用と森林荒廃によって近代初期の領邦国家は森林保全の対策を講じざるをえなかったことをくりかえし強調している．19世紀以来の長い伝統をもち，わが国にも少なからぬ影響を及ぼしてきたドイツ林学の発達が，そうした領邦国家の森林荒廃対策とかかわりをもっていたことはたしかである．また環境・森林問題への一般的関心のたかまりのなかで，最近のドイツの歴史学界でも森林の歴史にかんする本格的実証研究への取り組みが開始され，J・アルマン[8]は西南ドイツのファルツについて，W・ゼルター[8]はウェストファーレンのザウアーラントについて，森林荒廃，森林資源をめぐる紛争，領邦国家による森林政策などを詳細に明らかにしている．

しかし，これらの森林史研究はいずれも中世の開墾の影響には言及しても，近代の農地開発にはまったく触れていない．その理由は単純であり，後述の

ように，近代に農地開発の対象とされたのは森林ではなく，もっぱら「不毛地」だったからである．18-19 世初期のドイツ諸邦の政府は木材不足による木材価格高騰のなかで森林保全と林業促進をはかる必要に迫られると同時に，人口増加による食糧価格高騰に直面して農地拡大と農業合理化をもすすめなければならなかった．これらの政策を両立させるためには，森林を農地に転用することはできず，開墾の対象とされたのはそれまで森林にも農地にも役立たなかった「不毛地」，「荒蕪地」，「原野」，「泥炭地」等であった．したがって，ドイツにおける従来の森林・林業史研究は近代の農地開発の問題を視野のなかに入れてこなかったし，環境問題を取り扱った歴史研究も中世の開墾による森林破壊には注目しても，近代の開墾をかえりみようとはしなかった．そこには，植生に乏しい「不毛地」の開発は，環境・森林保全の見地からも有益とみなす姿勢が見られないだろうか．

2　イプセンの農地開発論

ドイツで近代の農地開発を環境とのかかわりでとりあげた研究は，これまで存在しない．そもそも，近代の農地開発への関心そのものが歴史家のなかにほとんどないといっても過言ではあるまい．近代ドイツ農業史の領域で農地開発があまり重視されてこなかったのは，ある意味で当然だった．西欧全体の歴史発展から見ると，農地開発が活発におこなわれたのは第一に中世盛期の 11-13 世紀のいわゆる「大開墾時代」であり，次いでイギリスの第一次囲い込みやオランダの干拓事業がおこなわれた 16 世紀のことであり，18 世紀以降の農業史の基本問題をなしたのは「農業革命」，すなわち休閑地の廃止，合理的輪作農法の導入による農業合理化だったからであり，ボズラップ風にいえば農業休耕期間の短縮または廃止による農業生産性の上昇であった[9]．18-19 世紀のヨーロッパでは，海外植民地における開墾を別とすれば，農地開発はもはや過去の問題としかみなされなかった．

そのなかで，近代の農地開発を農業改革，「農民解放」との関連で論じたのはグンター・イプセンである．従来，近代ドイツ農業史の最大のテーマを

なしてきたのは，プロイセンをはじめとする諸邦の農業改革，いわゆる「農民解放」であった．周知のように，「農民解放」については19世紀末のクナップの研究以来，封建領主制からの農民の有償解放が彼らの経営を圧迫し，自由な発展の障害となった点を強調する否定的あるいは消極的評価が主流を占めてきた．これに対して異論を唱えたのが，イプセンである．彼は次のようにいう[10]．

「農民解放」は諸個人の自由な活動によって民衆の力を国家の繁栄に結びつけるために，彼らを閉鎖的身分制から解放することを目的とした．ところが，後世の評価において改革はさまざまな「不当性」を批判されてきた．しかし，改革がめざした市民的土地所有権への転換そのものを「不当」とすることはできないはずである．また，領主・農民関係の「調整」の評価において，農民はその土地の三分の一ないし二分の一を領主に割譲しなければならなかった点が「不当」とみなされているが，貴族領主がこうした恩恵を認められたのは，立法者が国家の安寧を保つうえで彼らの政治・経済的役割に配慮せざるをえなかったためである．しかもそうした問題は改革のごく一側面にすぎず，改革全体の性格を決定づけるものではなかった．むしろ，農業改革は不毛地と劣悪な放牧地が国土の過半をなしていたプロイセンの農地開発に大きな成果をあげた点で高く評価されるべきである．すなわち，領主への土地割譲によって保有地面積が減った農民は開墾に努力し，1864年までにプロイセンの耕地は倍増し，東北部では2.5倍に増加した．また，農民は放牧地の減少による飼料不足を補うために，休閑地への飼料作物栽培をともなう改良三圃制への転換に踏み切った．こうした農地開墾と農業改良によって，農民村落における人口の構成も大きく変化した．18世紀までは相続権のない非婚の農民子弟は独身の奉公人となるか，都市の傭兵となった．ところが，改革以来そうした農民子弟も小屋住み農 Eigenkätner として世帯をもち，子供をつくることができるようになった．また農場でも，その面積拡大によって農業労働力需要が増え，農業労働者さえ早期に結婚して多くの子供をつくった．こうしてイプセンによれば，プロイセン「農民解放」は「国家的に

実現された農地開発」として，「労働人口密度の増大」によって労働集約的な合理的農業を促進したのである．

こうした「農民解放」肯定論は，東エルベの領主・農民関係の調整における農民負担の有償償却の大きさに問題点をみいだす批判的見解とはかなり隔たっており，プロイセンにおける近代農業の発展に農業改革がはたした役割の過大評価ではないかという疑問が投げかけられて当然である．また，彼の議論は農業改革の一側面を指摘したにすぎず，領主・農民関係の変化，農業労働者問題，三月革命における農民運動との因果関係など多岐にわたる諸問題を包括的にとらえたわけではなかった．したがって，イプセンの主張はプロイセン農業改革にかんする歴史研究の流れを根本的に変えるほどの大きな影響力はもちえなかったといってさしつかえない．また，彼の農地開発論には環境や農村景観の変化の歴史への関心もまったく欠如していることはいうまでもない．

だが，われわれの視角をかえて，近代農村の人口成長や食糧不足問題との関連でイプセンの議論を検討してみると，そこには重要な示唆が含まれているようにおもわれる．すでに述べたように，中世盛期の人口増加を支えたのが活発な農地開発であったことはよく知られているが，これに対して近代の人口増加の経済的要因として一般に重視されてきたのは，第一に休閑地の縮小などによる農業生産性の上昇，第二に農村工業の普及である．とりわけ急速に増加する貧しい農村下層人口に就労機会を提供した農村工業の発展は，「プロト工業化」として注目を集め，多くの議論を呼び起こした．ドイツでもシュレージエンやミンデン・ラーウェンスベルクの麻紡織業などの「プロト工業化」が歴史人口学とのかかわりで積極的にとりあげられた．これに対して，農地開発が下層人口増加との関連でかえりみられたことはほとんどなかったといってよい．周知のように，農村工業に従事した下層人口の大部分はわずかながら土地をもち，零細農業経営からの収入にも依存する半農半工の農村人口であった．にもかかわらず，彼らがどのようにしてその土地を獲得したのかはあまり重要な問題とはされなかった．プロト工業化について語

ろうとするなら，農村工業人口を食糧供給面から支えた零細農業経営の増加とその食糧増産のメカニズムについても明らかにしなければならないはずである．イプセンの農地開発論は，この点について一つの手がかりを提供しているようにおもわれる．

3　農地開発の数量史的研究

イプセン以後，農地開発はもっぱら農業改革後の農業生産性の上昇との関連で数量史的に把握されてきた．1956年にはビッターマン[11]がドイツ全体について1800-1950年の農業改良による穀物や畜産物の増加，土地生産性，労働生産性の上昇などとともに，農地開発規模についても数量的研究をおこなった．1960年にはフィンケンシュタイン[12]もプロイセンを中心とする農業成長における農地開発の数量史的把握を試みた．ほかに，1975年のアメリカ人ディックラーのプロイセンについての論文と，1986年の旧東ドイツのベルトホルトの論文がある[13]．

これらの研究が農地開発の意義をどこまで明らかにしえたのか，その到達点を確認しておきたい．18世紀以前の時期についてはベルトホルトの素描があるのみで，詳細はいまだに明らかにされていない．ベルトホルトによれば，17世紀末に開墾の対象となるような予備地は西北ドイツと東エルベにかなり存在し，西ドイツ地域にはもはや残されてなかった．18世紀にとくに開発が進んだのは西北ドイツのオストフリースラント，ウェーザー川とエルベ川の間の低湿地，それに東エルベのブランデンブルクのオーデル川流域の低湿地である．だが，ベルトホルトの研究から，どれほどの面積が開発されたのか詳細を知ることはできない[14]．

19世紀以降について，ドイツ全体の農地開発の概況を明らかにしているのはビッターマンである．彼によれば，表1の示すように，1800年以降のドイツで農地面積が最も増加したのは1800-1878年の時期であり，この期間に総面積における農地面積の割合は55.5%から67.9%へ増え，不毛地は19.5%から6.4%へ減少した．他方，森林面積は全期間をとおして微増傾向

表1　1800-1950年のドイツにおける土地利用の割合（%）

年	農　地	森　林	荒地・不毛地
1800	55.5	25.0	19.5
1878	67.9	25.7	6.4
1883	66.0	25.7	8.3
1900	64.8	25.9	9.4
1914	64.3	26.3	9.4
1925	60.6	27.2	10.0
1949/51	59.0	28.2	11.4

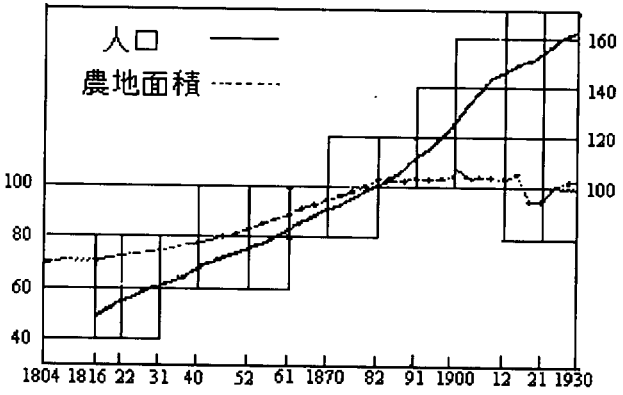
Bittermann, a. a. O., S. 21

を示し，少なくとも量的な意味での森林破壊はおこなわれなかったとみられる．1800年の数値は推定にもとづいており，不確実であるが，1878年以降土地利用に大きな変化が認められず，農地開発が1878年以前の時期に集中していることは確かである．

さらに詳細な研究をおこなったのはフィンケンシュタインであり，図1に見られるように，農業用地は1882年まで増加し，それ以後停滞している．この場合にも，1804-1822年の数字は根拠不明であり，信頼をおきがたい．それでも，1870年代まで農地開発が進行したことは明瞭である．フィンケンシュタインの最も重要な業績は，次の点を明らかにしたことにある．すなわち，1880年頃までプロイセンの農地面積は絶えず増加したが，人口増加率は農地面積の増加率をうわまわり，そこから生じうる食糧不足は農業生産性の上昇によって補われた．1880年代より農地面積の拡大はおこなわれなくなり，それに対して人口は増加しつづけたが，図2のように，人口増加を超える生産性の上昇がおこなわれた．つまり，絶えず増加傾向を示す人口と食糧需要に対して，1880年頃までは農地面積拡大と農業生産性の上昇が食糧供給の増加に寄与し，1880年以降はもっぱら農業生産性の上昇だけが供給増大の役割をはたした．

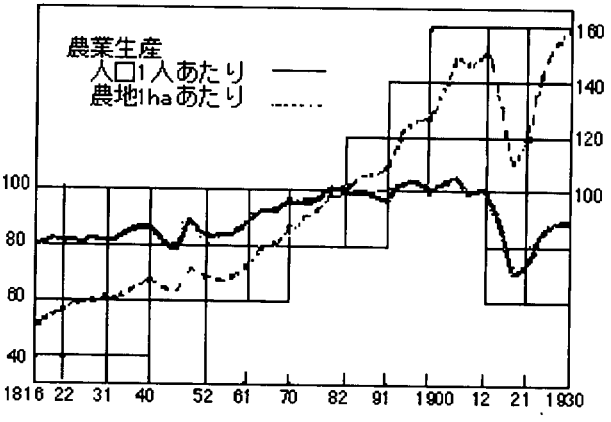
とくにプロイセン領東エルベ農業における労働生産性の上昇と農地面積の増加を研究したのはディックラーであり，彼によれば，労働生産性の伸びは19世紀前半には10年間あたりの平均値で4.4%であったのに対して，耕地

図1　ドイツの人口と農地面積（1804-1930年）
1879-82年＝100



Finckenstein, a.a.O., S.104.

図2　人口1人あたりおよび農地1haあたりの農業生産（1816-1930年）
1879-82年＝100



Finckenstein, a.a.O., S.104.

表2　プロイセン領東エルベにおける土地利用（単位＝100万ha）

年	耕　地	牧草地	森　林	その他	計
1800	7.4	7.2	5.9	2.2	22.7
1840	9.4	7.4	4.7	1.2	22.7
1861	12.0	3.7	5.5	1.5	22.7
1885	12.4	3.7	5.3	1.3	22.7
1895	12.6	3.5	5.3	1.3	22.7
1907	12.6	3.4	5.4	1.3	22.7

Dikcler, a. a. O., S. 273.

の拡大は表2のとおり1800-1840年に27%，10年間あたり6.2%であり，労働生産性の上昇率を大きくうわまわった．したがって，農業改革期の19世紀前半の農地開発は農業生産と食糧増産に大きな役割をはたした．もっとも，ディックラーがおこなった1800-40年の農地面積の計算はかならずしも信頼できるものではないので，彼の議論がどこまで正しいかは疑問である．フィンケンシュタインの場合と同様に，農地面積の拡大が農業生産と食糧供給の増大に重要な役割をはたしたことだけはたしかであろう．

以上の数量史研究の検討から，すくなくとも次のような二点を確認しうるだろう．

1）19世紀初期より第二次大戦後まで森林面積が減少したことはなく，近代ドイツでは農地開発は森林破壊の直接的原因とはならず，「不毛地」の開墾によっておこなわれた．

2）農地開発は1870年代までおこなわれ，農業生産と食糧供給の増加に重要な役割をはたしたが，1880年代以降はほとんどおこなわれなくなった．

もちろん農地開発にかんする歴史研究はこのほかにも各地の地域史や郷土史の枠内である程度おこなわれてはいるが，あまり盛んといえず，ましてドイツ全体についての広域研究はきわめて乏しいのが実情であり，一般的な関心の低さを示している，したがって，上述の諸研究も人口・食糧問題との関連だけでなく，開発の地域分布，集落形成，入植者の出自と世帯形成などの

問題についてもたちいった分析はおこなっておらず，その多くは今後の研究課題として残されている．

4　19世紀の農地開発規模

近代の農地開発は環境・森林史においても，農業史や人口史においてもあまりかえりみられなかったので，農地開発と人口圧力との関連，食糧供給への貢献度，入植した人口と世帯数，その出身地と出身階層，開発農地における農業経営の性格，開拓地における集落形成など，重要な諸問題について従来の研究がほとんど答えていないのは当然としても，農地開発の規模だけに限っても，近代の農地開発が始まった時期，新たに開発された農地面積の規模，農地開発がおこなわれた地域とその分布，農地に転換される前の未墾地の性格や形状など，なお不明な点が多い．これらに対する解答を，ドイツ全国統計あるいはプロイセン全邦についての統計から直接導き出そううとしても不可能であり，とくに農地開発が始まった時期については，おそらく18世紀あるいは17世紀にさかのぼると考えられるが，統計的に確認することはほとんど不可能である．さしあたって小論では，19世紀のいくつかの地域の農地開発の規模について検討することを課題としたい．

プロイセン領東エルベ

プロイセンについては1849年以降の統計はかなり確実であるが，それ以前の統計は前述のように不正確である．プロイセン全邦についての統計は表3に示してあるが，このうち1816年のフィンケンシュタインの農地面積を基準とすれば，かなりの規模の農地開発がおこなわれたことになるが，1817年のハッセルによる農地面積を基準にすれば農地開発はほとんどおこなわれなかったという正反対の結論に導かれることになる．前者は農地面積の過小評価，後者は過大評価ではないかと考えられ，いずれも全面的には信頼できない．

そこで，プロイセンを東エルベと西エルベ（ラインとウェストファーレ

表3　プロイセン全邦の土地利用の割合（%）

年	農　地	森　林	荒蕪地
1816	45.5	19.0	40.3
1817	59.1	23.9	17.0
1849	58.3	18.1	23.7
1852	60.6	19.8	19.7
1861	61.4	28.6	10.2
1878	65.0	29.5	5.4
1893	67.3	24.7	8.0

表4　プロイセン領東エルベの土地利用の割合（%）

年	耕地 ぶどう畑	牧草地	森　林	荒蕪地
1849	43.3	14.5	16.5	25.7
1852	45.6	15.0	18.3	21.1
1861	48.0	14.8	22.2	15.0
1878	54.3	15.8	23.5	6.3
1893	55.0	13.8	23.7	7.6

1816年　Finckenstein, a. a. O., S. 100.
1817年　Bittermann, a. a. O., S. 17.
1849, 52年　F. W. C. Dietrici, Mittheilungen des statistischen Bureau's in Berlin, 8. Jahgang, Nr. 9. 1854.
1861年　G. v. Viehbahn, (Hrsg.), Statistik des zollvereinten und nördlichen Deutschlands, Teil II, Berlin 1862.
1878, 93年　Statistisches Jahrbuch für das deutsche Reich.

ン）の東西両地域に分けて検討してみよう．まず東エルベについて見ると，表2（ディックラー）と筆者が作成した表4とを比較して判明するのは，ディックラーの計算はまったく信頼できないということである．彼によれば，19世紀に東エルベでは農地開発はあまりおこなわれなかったことになるが，表4の示すとおり，19世紀後半だけに限ってもかなりの農地面積の増加が認められ，荒蕪地は1849-93年に三分の一に減少しているのである．したがって，19世紀前半についても農地開発がおこなわれたと推定されるのだが，

表5　プロイセン州（Ost- und Westpreußen）の土地利用の割合（%）

年	耕　地	採草地	放牧地等	森　林	荒蕪地
1830	34.7	13.4	16.6	30.7	8.1
1849	42.6	9.7	8.4	15.3	27.7
1852	44.7	9.8	8.7	15.7	21.1
1861	46.7	9.8	8.1	19.1	16.2
1878	52.3	10.6	10.2	19.4	7.4
1893	54.3	9.7	7.2	19.1	9.7

1830年　August Freiherr von Haxthausen, Die ländliche Verfassung in den einzelnen Provinzen der preußischen Monarchie, 1 Bd., Königsberg 1839.

残念ながらこの時期についてどの統計も十分には信頼できない．それは，耕地以外の採草地，放牧地，森林，荒蕪地，不毛地などについて明確な区分がなされていなかったためであるとおもわれる．正確な土地統計の前提として，官庁による土地測量とともに，課税のための土地評価，査定が不可欠であるが，この時期のプロイセン東部では王領と貴族領が混在し，王領については正確な把握が可能であったとしても，貴族領の公的査定が可能だったかどうか疑問である．たとえば，1830年のプロイセン州（後のオストプロイセン，ウェストプロイセン両州を含む）についてのハクストハウゼンの土地統計と1849年移行の統計とを比べてみると，表5のように，1830-49年に牧草地と森林は半減し，不毛地は3倍を超える増加を示しているが，こうした激変は現実にはありえないことである．統計においてこうしたことが起きるのは，ハクストハウゼンの統計が牧草地，森林，荒蕪地を正確に区別してとらえていなかったためとおもわれる．というよりも，現実には放牧地とも森林ともいえる放牧用の潅木林が存在したし，放牧地，荒蕪地のいずれともみなしうる牧羊のためのやせた草地も存在し，その統計区分は査定しだいでどのようにでも変動しえた．これに対して，耕地面積は最大の地税徴収源としてかなり正確に把握されたと考えられ，表5の耕地面積については1830年と49年以降の時期との間に極端な断絶は認められず，19世紀をつうじて耕地面積はほぼ一貫して増えたものとみなされる．

表6　プロイセン領西エルベ（Rhein-Westfalen）の土地利用（%）

年	耕　地	採草地	放牧地	森　林	荒蕪地
1849	42.8	7.1	10.4	25.9	13.8
1852	42.2	7.3	10.9	27.0	12.6
1861	43.4	7.3	10.7	28.6	10.2
1878	44.5	7.7	12.8	29.5	5.4
1893	44.7	7.8	8.1	29.6	9.8

表7　ウェストファーレンの土地利用（%）

年	耕地・庭園	牧 草 地	森　　林	荒蕪地等
1820-30	44.4	18	13.3	24.3
1849	42.6	18.6	25.6	13.2
1860	41.5	17	26.1	15.3
1878	41.9	25	27.8	5.1
1893	42.4	18.3	28	11.4

1820-30年：Stefan Brakensiek, Agrarreform und Ländliche Gesellschaft. Die Privatisierung der Marken in Nordwestdeutschalnd 1750-1800, Paderborn 1991, S. 452.

プロイセン領西エルベ（ライン・ウェストファーレン）

他方プロイセン西部のライン・ウェストファーレン両州については，東部と同じく1849年以降の土地統計は存在するが，19世紀前半については把握がむずかしい．表6に見られるように，1849年以降顕著な変化はなく，耕地もほとんど増加していない．東エルベと比べて農地開発は明らかに小規模だったと考えられる．1820-30年の統計が知られるウェストファーレンの土地利用の変化を見ると（表7），19世紀前半に森林と荒蕪地の面積は変化しているが，これは統計基準のあいまいさによるものではないかと推定され，実際の変化を示すものかどうか疑わしい．19世紀前半に耕地も牧草地も増加していないからである．いずれにしても，農地開発がほとんどおこなわれなかったことだけは確かである[15]．

表8　ハノーファーの土地利用（%）

年	土地利用	リューネブルク	ブレーメン・フェールデン	ホーヤ・ディープホルツ	エムスラント	オストフリースラント
1825/31	農地	34.1	40.6	37.4	21	58.2
	森林	17.0	3.6	13.8	10.7	0.6
	荒蕪地等	48.9	55.8	48.8	68.3	41.2
1848/49	耕地	25.2	12.5	27.4	11.9	29.6
	草地	16.9	23.3	12.9	10.7	32.6
	森林	15.3	3.8	10	3	0.6
	荒蕪地	37.6	54.5	44.7	69.4	23.2
	その他	5.0	5.9	5.0	5.0	5.0
1893	耕地	30.8	27.8	32	17.1	37.3
	草地	21.6	28.5	27.4	27.9	37.3
	森林	20.1	6.3	11.6	8.6	2.4
	荒蕪地	22.4	28.5	23.1	42.4	16.3
	その他	5.1	8.9	5.9	4.0	6.7

年	土地利用	オスナブリュック	カーレンベルク	ヒルデスハイム	ゲッティンゲン・グルーベンハーゲン	全　体
1825/31	農地	44.2	42.2	58.2	52.5	39.5
	森林	13.7	26.8	23.3	36.2	14.2
	荒蕪地等	42.1	31.0	18.5	11.3	46.3
1848/49	耕地	29.6	39.7	56.3	46.7	26.6
	草地	25.8	12.6	6.7	8.3	17.3
	森林	13.0	23.1	21.8	27.2	12.0
	荒蕪地	26.6	19.6	10.1	12.9	38.9
	その他	5.0	5.0	5.0	5.0	5.1
1893	耕地	33.5	44.9	52.3	46.3	33.0
	草地	24.6	20.4	30.0	10.8	24.2
	森林	22.2	17.8	4.2	37.8	15.3
	荒蕪地	14.6	10.9	4.2	0.4	21.5
	その他	5.1	6.0	2.8	4.7	6.0

Brakensiek, a. a. O., S. 450 ff.

表 9　イギリスの農地面積の構成（単位＝1000 エーカー）

年	耕地	牧草地	農地
1770	10300	16700	27000
1801	11350	16796	28146
1808	11575	17495	29070
1827	11143	17605	28749
1836	15092	16363	31455
1854	15261	12392	27653

Hugh C. Prince, The Changing Rural Landscape, 1750-1850, in : The Agrarian History of England and Wales, Vol. VI, ed. by G. E. Mingay, Cambridge Univ. Press 1989, p. 30.

西北ドイツ（ハノーファー）

西北ドイツの大部分を占めるハノーファーは，表 8 のように，ドイツの他地域とはかなり異なった独特の様相を呈している．第一に未墾地が非常に多く，東エルベよりも農地開発の余地がはるかに大きかった．第二に森林の割合が非常に低く，ドイツでは総面積の約 1/4 が森林からなっていたのに対して，ここでは約 15% 以下と際だって少なかった．第三に農地の約 4 割を牧草地が占め，ドイツの他地域に比べて農業における畜産の比重がはるかに高かった．こうした傾向は同じ西北ドイツのシュレスイヒ・ホルシュタイン，オルデンブルクにも共通すると見られる．ただし，ハノーファーのなかでも東南部のカーレンベルク，ヒルデスハイムおよびゲッティンゲンの三地域にはこうした傾向は見られず，未墾の荒蕪地が少なく，森林に富み，耕作が農業の中心をなし，西北ドイツ的特徴を欠いており，むしろ中部ドイツ的農村景観を呈している．

イプセンはプロイセン領東エルベの農地開発を強調したが，西北ドイツと東エルベを比較した場合，西北ドイツの農地開発の方がはるかに重要だったことは歴然としている．またイプセンに限らず，一般に近代ドイツにおける農業の合理化，イギリス式農法の導入について語る場合，しばしばプロイセンがイギリス的大農場経営に類似した事例としてとりあげられるが，それはかならずしも適切ではない．なぜなら，プロイセンは農業生産と農村景観に

表10　バーデンの土地利用（%）

年	耕地・ぶどう園	採草地	放牧地	森林	その他
1810	40.6	9.4	4.2	42.0	5.9
1833	40.9	10.1	4.6	37.6	6.7
1861	40.5	10.3	5.5	33.3	10.5
1878	43.2	12.8	2.3	37.5	4.2
1893	39.8	13.5	3.6	37.5	5.6

1810, 1833年　A. J. V. Heunisch, Geographisch-statistisch-topographische Beschreibung des Großherzogtums Baden, Heidelberg 1833, S. 68.

1861年　Viehbahn, a. a. O.

1878, 93年　Statistisches Jahrbuch, a. a. O.

おいてイギリスとはきわめて異なった性格をもっていたからである．これは，前掲の表4のプロイセン土地利用と表9のイギリスの農地利用とを比べれば，明白となろう．イギリス農業においては牧草地，したがってまた畜産の占める位置が非常に大きく，穀作を中心とするプロイセン農業とは対照的でさえある．他方，西北ドイツ農業はもともと大きかった牧草地における畜産の比重が19世紀の農地開発の過程でさらに増大した．表8からわかるように，19世紀のイギリスでは農地開発は過去のものとなっていたが，いぜんとして農地の半分程度が牧草地にあてられ，他方，西北ドイツは活発な農地開発の過程で農業経営の重点を牧草地における畜産に移すことによって，ドイツのなかでは最もイギリス的農業生産に接近した地域とみなされる[16]．この点で，西北ドイツの農地開発は近代ドイツ農業史においても注目すべき地位を占めるというべきだろう．

南ドイツ（バーデン，バイエルン）

最後に南ドイツについて見るなら，表10のように，バーデンでは19世紀全体をとおして土地利用に大きな変化は認められず，農地開発はほとんどおこなわれなかったとみなされる．バイエルンにかんする表11は19世紀後半しか示していないが，ここでも変化は認められない．南ドイツも森林が多く，

表 11　バイエルンの土地利用（単位＝ha）

年	農　地	耕地・庭園	草地等	森　林	不毛地	計
1853	4573112	3003340	1569722	2502007		11648231
1863	4579512	3102428	1477084	2374075		11533099
1873				2597915		
1878	4575786	3070378	1508408		216674	
1882				2592206		11960452

Anton Kalchgruben, Untersuchungen über landwirtschaftliche speziell bäuerliche Verhältnisse in Altbeyern, München 1885.

農業は耕作地における穀作が中心で，牧草地における畜産は副次的地位しか占めておらず，その点ではすでに見た東エルベ，ライン・ウェストファーレンと同じ傾向を示し，19 世紀に農地開発がほとんどおこなわれなかったという点ではライン・ウェストファーレンと似ており，すでに 18 世紀以前に農地開発は完了していたといってよい．

小括

以上，すべてのドイツ諸地域について検討したわけではないが，近代の農地開発という観点から見ると，ドイツ農村は次のような三地域類型に区分しうるとおもわれる．

1）西北ドイツ

農地開発が最も盛んにおこなわれた地域で，とくに北海沿岸地帯では 19 世紀まで土地総面積の 4 割も占める未墾地が残されており，19 世紀の開墾によって農村景観は大きな変貌をとげた．この地域は森林が少なく，未墾地の大半は北海沿岸やエムス川，ウェーゼル川，エルベ川などの河川流域の低湿地帯に属し，穀物栽培には不利であったため，牧草地における畜産が農業経営においてますます重要な地位を占めるようになった．

2）東エルベ

西北ドイツに次いで農地開発の規模が大きかった地域で，森林は西北ド

イツより大きな割合を占めていたが，19世紀をとおして森林面積は減少するよりむしろ若干の増加を示し，ここでも開発の主たる対象とされたのは低湿地であった．だが，全体として東エルベ農業の重点は小麦，ライ麦などの穀作にあって，牧草地における畜産は副次的な地位しか占めず，西北ドイツとは異なった農村景観と農業経営を特徴とした．

3）西，南，中部ドイツ

農地開発は18世紀以前に基本的に完了しており，19世紀には農地開発はほとんどおこなわれず，したがって農村景観もあまり変化を示さなかった．この地域は広大であるため，その一般的特徴をとらえるのは困難ではあるが，穀物栽培が農業の中心をなし，定住様式としては複雑な共同耕地を基礎とする三圃制村落が支配的であり，豊富な森林，とくに山地の共有林へ向けての開墾は早期に完了し，もはや新たな農地拡大の余地は残されておらず，その意味で農村景観はドイツのなかで最も早い時期に成熟の域に達していた．

こうして，19世紀の農地開発にともなう農村景観・環境の変化において最も注目すべきは西北ドイツであるが，農法や定住様式をはじめとするその変化の詳細な検討は別の機会に譲らなければならない．

1）クライヴ・ポンティング（石弘之・京都大学環境史研究会訳）『緑の世界史』上・下，1994年．

2）西欧における農地開発と農業発展にかんする全般的な歴史叙述としては，Wilhelm Abel, Agrarkrisen und Agrarkonjunktur. Eine Geschichte der Land- und Ernahrungs-wirtschaft Mitteleuropas seit dem hohem Mittelalter, Hamburg und Berlin 2. Afl. 1966（アーベル（寺尾誠訳）『農業恐慌と景気循環』，1986年）. Ders., Massenarmut und Hungerkrisen im vorindustriellen Europa. Hamburg und Berlin 1974. Slicher van Bath, The Agrarian History of Western Europe A. D. 500-1850. translated by Olive Ordish, London 1963.

3）E. A. リグリィ（近藤正臣訳）『エネルギーと産業革命』，1991年．

4）Werner Sombart, Der moderne Kapitalismus, 2. Af., 2. Bd, 1916, S. 1137 ff.

5）Rolf Peter Sieferle, Der unterirdische Wald. Energiekrise und Industri-

elle Revolution, München 1982.

6) Joachim Radkau, Holzverkanppung und Krisenbewußtsein im 18. Jahrhundert, in : Geschichte und Gesellschaft, 9. Jg., 1983. Ders., Zur angeblichen Energiekrise des 18. Jahrhunderts : Revisionistische Betrachtungen über die "Holznot", in : Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, 73. Bd., 1986. Ders., Technik in Deutschland vom 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart, Frankfurt a. M. 1989.

7) Karl Hasel, Forstgeschichte. Ein Grundriß für Studium und Praxis, Hamburg und Berlin 1985. ほかに重要な文献として, Heinrich Rubner, Forstgeschichte im Zeitalter der industriellen Revolution, Berlin 1967. August Bernhard, Geschichte des Waldeigentums, der Waldwirtschaft und Forstwirtschaft in Deutschland, 3 Bde., Aalen 1966.

8) Joachim Allmann, Der Wald in der frühen Neuzeit. Eine mentalitäts- und sozial-geschictliche Untersuchung am Beispiel des Pfalzer Raumes 1500-1800, Berlin 1989.

8) Bernhard Selter, Waldnutzung und Ländliche Gesellschaft. Landwirtschaftlicher "Nähwald" und neue Holzökonomie im Sauerlande des 18. und 19. Jahrhunderts, Paderborn 1995.

9) Ester Boserup, The Conditions of Agricultural Growth. The Economics of Agrarian Change under Population Pressure, London 1965. (ボーズラップ (安沢秀一・安沢みね訳)『農業成長の諸条件』)

10) Gunther Ipsen, Die preußische Bauernbefreiung als Lamdesasubau, in : Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie, Jg. 2/1, 1954.

11) Eberhard Bittermann, Die landwirtschaftliche Produktion in Deutschland 1800-1950, in : Kühn-Archiv 70, 1956.

12) Hans Wolfram Finck von Finckenstein, Die Entwicklung der Landwirtschaft in Preußen und Deutschland 1800-1930, Würzburg 1960.

13) Robert A. Dickler, Ortganisation and Change in Productivity in Eastern Prussia, in : W. N. Parker and Eric L. Jones (ed.), European Peasants and Their Markets. Essays in Agararian Economic History, Princeton Univ. Press 1975. Rudolf Berthold, Wachstumsprobleme der landwirtschaftlichen Nutzfläche im Spätfeudalismus (zirka 1500 bis 1800), in : Harmt Harnisch und Gerhard Helz (Hrsg.), Deutsche Agrargeshichte des Spätfeudalismus, Belin 1986.

14）18世紀の東エルベにおける開発については，石坂昭雄「ヴェストプロイセンにおけるネーデルラント系メンノー派コロニーの形成とその経済活動（1525-1772）」，北海道大学『経済学研究』(1)—(3), 34-4, 35-1, 35-2, 1985年.

15）ただし，ライン・ウェストファーレンの北部と南部はかなり異なった性格を示し，農業史上，北部は西北ドイツ的な孤立農圃制地帯，南部は三圃制村落地帯に属するとされる．また農地開発の視点から観察しても，たとえばブラーケンジークの研究によれば，北ウェウストファーレンのミンデン・ラーウェンスベルクでは18世紀の共同地分割を契機に農地開発がおこなわれ，西北ドイツとの共通点が多い．したがって，北部は西北ドイツに含めて考えることも可能である．Vgl. Stefan Brakensiek, Agrarreform und Ländliche Gesellschaft. Die Privatisierung der Marken in Nordwestdeutschalnd 1750-1800, Paderborn 1991.

16）もちろん，イギリス農業も一様ではなく，大きな地域差が存在したことは事実であるが，この点を考慮してもなお，穀作に重点を置くドイツ農業との対比で，イギリス農業における畜産の重要性は際だっているといわなければならない．この問題についての検討は，別の機会に譲りたい．

（一橋大学教授）